

東京都千代田区

赤坂プリンス クラシックハウス



1930（昭和5）年に竣工した旧李王家東京邸を、綿密な保存・復原工事によって再生した「赤坂プリンス クラシックハウス」。大規模な都市開発に伴う建物の移動（曳家）などを経て、現在は東京ガーデンテラス紀尾井町の敷地内に位置する。昭和初期の貴重な洋館が、現代の巨大なビル群と見事な調和を見せながら当時の姿を今に伝えている。



夏の強い日差しの中、紀尾井町を歩く。近代的なビルの足元、緑に抱かれるように瀟洒な洋館が静かに佇んでいる。「赤坂プリンス クラシックハウス」だ。かつて背後にそびえていた、丹下健三設計による雁行デザインの旧赤坂プリンスホテルとともに、東京の発展を見守り続けてきた。

韓国・李王家の東京邸宅として、当時の宮内省^{たくみりやう}内匠寮の技師や職人たちの手で丁寧に創り出された。刷毛引き模様のペーージュの壁と、濃褐色の木材が美しい対比を描く。ハーフティンバーと言われる技法である。15～16世紀の英国・チューダー朝に起源をもつ建築様式だ。外観は見る角度によって表情を大きく変える。側面に回り込むと、小さな三角屋根がいくつも連なるデザインが現れる。威厳のなかに落ち着いた愛らしさが同居し、見る者の目を奪う。

館内へ足を踏み入れると、しっとりと落ち着いた空間が広がる。決して華美ではない。だが、品の良い調度品や内装からは、かつての主人の確かな美学が感じられる。最も心惹かれたのは、階段室を彩る3枚のコンパクトなスタンドグラスだ。取材当日は真夏の陽光が鮮やかに降り注いでいた。雨の日、あるいは雪の降る日に、このガラスを通した光はどう変化するのだろうか。日韓の複雑な政治的関係のもとで、数奇な運命を辿ったかつての主も、同じ場所に立ち、移ろいゆく季節の光を見つめていたに違いない。

現在、東京都指定有形文化財であるこの名建築は、レストランやウェディングの舞台として多くの人々を非日常へと誘っている。文化財の価値を未来へ継承するための丁寧な改修を重ねながら、今なお新たな記憶を刻み続けている。一歩足を踏み入れれば、いつでも優美な時代へと静かに回帰できる空間だ。



円卓を配した重厚な木造作の部屋は、落ち着いた色調が親密な空間を演出（上）。対照的に、精緻な漆喰飾りの天井とシャンデリアが目を引き部屋は、出窓からの自然光が開放感をもたらす（下）。性格の異なる2つの室内意匠から、当時の多様な迎賓スタイルと空間構成の妙が浮かび上がる。